

第6章 タイ語の移動表現

高橋清子

1. タイ語移動表現の全体像

1.1. タイ語の特徴

タイ語を含むタイ諸語の系統帰属はまだはっきりわかっていないが、シナ・チベット語族に属するとする説とオーストロネシア語族に近いとする説がある (Benedict 1942, 三谷 1989)。タイ語は、音韻論の面からは声調という特徴的な音素を持つ声調言語に分類され、形態論の面からは語形が変化しない孤立語に分類される。統語論の面からは基本語順が「主語、動詞、目的語」、「被修飾語、修飾語」となる言語、あるいは複数の動詞(句)が接続詞を介さずに連続することを許す動詞(句)連続言語に分類される。談話分析の面からは主語や目的語などの統語上の概念よりも主題などの情報構造上の概念のほうが優位に働いて文章が構成されていく主題卓越言語に分類される。

特に注目すべき特徴は、第1に、性、数、法、時制(定動詞)などの文法範疇のパラダイムが成立しておらず、文法範疇概念の特定化が必須ではないこと (Bisang 1995, 2001, Diller 1993)、第2に、動詞と名詞句の結び付きはかなり自由で、必須項はなく、動詞の項(主語、目的語)と非項(付加詞など)を明確に区別することができないこと (峰岸 1988, 2002)、第3に、内容語と機能語が連続体をなし、両者を厳密に区別することが難しいこと (Intratrat 1996, Prasithrathsint 2010) である。

タイ語移動表現の主要構成素は動詞であり、最低一つの移動動詞を使えば単純な移動事象を表現し得るが、異種あるいは同種の動詞を複数使って一つの節—動詞(句)連続体—を作り、複雑だがまとまりのある一つの移動事象として表現することが多い。一つの節に動詞が複数共起した場合、意味的な

種類によって並び順が決まっているが、以上に挙げたタイ語の性質により、どれを主動詞と認めるかの判断が難しい (Zlatev & Yangklang 2003)。¹

1.2. タイ語移動表現の全体的特徴

タイ語移動表現の特徴は、使用される語彙が多種多様であること、そしてそれらの語彙を組み合わせて作られる構文パターンが、伸縮性に富んでいる(構文構成員の数や種類の可変性が高く、したがってその組み合わせの融通性が高い) ことである。タイ語の談話(現代文学作品、実験手順によって導かれた語り)から多数の移動表現を採集してその意味構造、統語構造を分析した Kessakul (2005) によると、生起頻度の観点から見た主体移動と客体移動(=使役移動)の選好表現パターンは以下のとおりであるという(「経路2動詞」など、動詞の種類については後述する)。

- ① 主体移動の選好表現パターン： 様態動詞, 経路2動詞, 直示動詞
- ② 客体移動の選好表現パターン： 使役動詞(=使役手段動詞), 経路2動詞, 直示動詞

タイ語移動表現の具体例を以下にいくつか挙げる。²

- (1) *cɔɔn wɨŋ khûn bandaj maa*
John run ascend stairs come
「ジョンは走って階段を上がって来た」
- (2) *cɔɔn yoon lûuk bɔɔn khûn pay thîi nâatàaŋ*
John throw ball ascend go at window
「ジョンはボールを投げ(ボールが)窓のところに上がって行った(=ジョンはボールを窓のところに投げ上げた)」
- (3) *cɔɔn thɔt sǎay taa khûn pay yaŋ nâatàaŋ*
John stretch line.of.vision ascend go to window

¹ タイ語移動表現の構文パターンに関する包括的な研究として Thepkanjana (1986, 2006), Muansuwan (2002), Zlatev (2003), Kessakul (2005) を挙げることができる。Takahashi (2009a) は、これらの論考(Zlatev (2003) を除く)で提案されているタイ語移動表現の統語構造、概念構造の異同を説明し、個々の論考の主張の妥当性について批判的に論じている。

² タイ語母語話者であるタサニー・メーターピスィット氏に本稿の例文の適格性を判断していただいた。ここに記して感謝申し上げます。

「ジョンは視線を伸ばし (視線が) 窓に上がって行った (=ジョンは窓を見上げた) 」

(4) *cəən məəŋ khûn pay yaŋ nâatàaŋ*

John look ascend go to window

「ジョンは見て (視線を送り) (視線が) 窓に上がって行った (=ジョンは窓を見上げた) 」

(5) *săay taa cəən məəŋ khûn pay yaŋ nâatàaŋ*

line.of.vision John look ascend go to window

「ジョンの視線は見て (伸びて) 窓に上がって行った (=ジョンは窓を見上げた) 」

主体移動表現(1)では様態動詞, 経路 2 動詞, 直示動詞が共起している。客体移動表現(2)と抽象的放射表現(3)では使役動詞, 経路 2 動詞, 直示動詞, 位置前置詞あるいは着点前置詞が共起している。抽象的放射表現(4), (5)では視覚動詞, 経路 2 動詞, 直示動詞, 着点前置詞が共起している。(4), (5)に使われている視覚動詞 *məəŋ* ‘look’ は使役動詞あるいは様態動詞として機能している。(4)では (視線を伸ばすことを意味する) 使役動詞として使われ, (5)では (視線が伸びることを意味する) 様態動詞として使われている。

(1)–(5)のすべてに直示動詞が使われていることからわかるように, タイ語ではどこかに直示的な基準点を定めて移動事象を表現することが多く, 移動の直示性 (話者が定めた任意の地点を基準として, そこから離れるのかあるいは近づくのか) を直示動詞によって明示的に表す傾向が強い。また, 使役事象 (移動の原因), 移動事象 (移動の様態と経路), 到着事象 (移動の結果) が異なる動詞で表現され得ることや, 移動の様態や経路が複数の動詞によって複合的, 重層的に表現され得ることも特筆すべき特徴である。タイ語の移動表現は非統合的表現 (言い換えれば, 分裂可能表現) の最たるものであろう。

(1)–(5)で使われている動詞のうち, 様態動詞, 経路 2 動詞, 直示動詞は移動動詞であるが, 使役動詞, 視覚動詞は移動動詞ではない。タイ語の移動動詞には, 様態動詞, 経路 2 動詞, 直示動詞の他に, 経路 1 動詞と到着動詞がある。経路 1 動詞は, Kessakul (2005) が *directional verbs* と呼び, Takahashi

(2009b) が *direction verbs* と呼んでいる動詞 (起動相あるいは前終結相 (prestadial) の経路動詞) である (2.3.2.節で詳述)。経路 2 動詞は, Kessakul (2005) と Takahashi (2009b) が *path verbs* と呼んでいる動詞 (達成相の経路動詞) である (2.3.3.節で詳述)。移動表現に使われるこれらの動詞の主たる意味要素はそれぞれ決まっており、役割分担が比較的はっきりしている。³ 使役動詞は移動の原因を表すことを本務とする。様態動詞は移動の様態を表すことを本務とする。経路 1 動詞は移動の起点/終点に関係する方向性, すなわち移動の起点あるいは終点によって規定できる相対的な方向性を表すことを本務とする。経路 2 動詞は移動の通過点や通過経路に関係する方向性, すなわち移動物とそれらの経路参照物との相互関係によって規定できる相対的な方向性を表すことを本務とする。直示動詞は移動の直示性を表すことを本務とする。到着動詞は移動の結果の出来事/付帯変化を表すことを本務とする。しかしタイ語の移動動詞は, 直示性を専門に表す直示動詞を除き, 主たる意味要素の他に, 具体的な使役の手段, 移動物, 付帯状況といった雑多な意味要素を包入しているものが多く, その意味内容は多様性に富む。

異なる種類の動詞が共起して単一の節をなし, 複雑だがまとまりのある単一の移動事象を表すとき, それらの動詞の生起スロットの並び順は「使役動詞, 様態動詞, 経路 1 動詞, 経路 2 動詞, 直示動詞, 到着動詞」となる。これらの動詞を一つずつ含んだ客体移動表現の例を(6)に挙げる。

| | | | | | |
|-----|-----------------|------------------|-------------|-------------|-----------------|
| (6) | <i>cɔɔn tɛ̀</i> | <i>lúuk bɔɔn</i> | <i>klîŋ</i> | <i>yɔɔn</i> | <i>khâw</i> |
| | John kick | ball | roll | turn.back | enter |
| | <i>maa yùt</i> | <i>troŋ</i> | <i>nâa</i> | <i>chán</i> | <i>phɔɔ dii</i> |
| | come halt | just | in.front.of | PRONOUN | just.right |

「ジョンはボールを蹴り (ボールが) 転がって折り返し入って来てちょうど私の前で止まった」

³ ただし, 「通過点に関係する方向性 (達成相)」と「結果の出来事 (瞬間相)」の両方を表し得る *khâw* ‘enter’ のように, 複数の異なったアスペクト解釈を許すため複数の種類に分類される動詞もある。

同じ種類の動詞が複数生起する場合もある。(7)では二つの様態動詞が使われている。*bin* ‘fly’ は一般様態動詞, *thalǎa* ‘swoop down’ は特定様態動詞である (2.3.1.節で詳述)。

- (7) *nók bin thalǎa loŋ maa*
bird fly swoop.down descend come
「鳥は飛んで急降下して来た」

単一の移動事象を表す移動表現の中に、様態動詞、経路1動詞、経路2動詞は複数生起し得るが、使役動詞、直示動詞、到着動詞は通常一つしか生起しない。移動の原因、直示性、結果の出来事／付帯変化という意味要素については、単一の事象構造を持った移動事象に一つの値しか特定することができないからである。⁴

タイ語移動表現の語用論的制約についても、ここで触れておきたい。タイ語では、瓶などの自力で動くと考えられていないものの移動は、特にアスペクト標識によって当該事象の時間的様態が特定されていない場合、経路動詞や直示動詞（具体性を欠いた方向性のみを特定する移動動詞）だけでその移動を表すことが難しい。例えば、(8)は特別な文脈がない限り非常に不自然に聞こえる。

- (8) ? *khùat ʔə̀ək pay*
bottle exit go
「瓶は出て行く」

自力で動くと考えられていないものの移動を表現するときには、(9), (10)のように移動の原因や様態を特定する動詞（使役動詞、様態動詞）を添えて、自力で動かないものがなぜ動くのかという背景をある程度明らかにし、事象の具体性を高めてやる必要がある。そうしなければ、現実世界で実際に起こる個別的な事象（定の事象）とはみなしづらいからである（高橋 2006: 40–42）。

⁴ 単一の移動事象であっても、ある一定の範囲内での方向性の定まらない移動（行ったり来たり）を表現するときは2種類の直示動詞を並べて使う (*pay maa* ‘go + come’)。また、複雑な移動の原因／手段（「手で持って押し込む」など）を表すときには、複数の使役動詞を使うこともある。

- (9) *kháw* *lɔɔy* *khùat* ɾə̀ək *pay*
 PRONOUN float bottle exit go

「 {彼/彼女/彼ら} が瓶を浮かべて、瓶が出て行く」

- (10) *khùat* *lɔɔy* ɾə̀ək *pay*
 bottle float exit go

「瓶は浮かんで出て行く」

一方、日頃よく目にしたり体験したりするもので、どのように自力で動くのかがわかっているもの（人間、車、風など）の移動であれば、(11)のように、経路動詞や直示動詞だけでその移動を表すことができる。世界に関する知識に基づく推論によって、具体的な移動事象（e.g. 歩いて行く、車に乗って行く）を容易に想起することができるからである。

- (11) *kháw* ɾə̀ək *pay*
 PRONOUN exit go

「 {彼/彼女/彼ら} は出て行く」

2. すべての移動事象タイプに共通する、移動事象と到着事象を表す形式

タイ語の主体移動表現、客体移動表現、抽象的放射表現に共通して使われる形式としては、移動の様態を表す形式、移動の経路を表す形式、移動の結果を表す形式が挙げられる。

- (12) *chán* *dəən* *maa* *càak* *nâa* *rooŋ rian*
 PRONOUN walk come from in.front.of school

「私は学校の前から歩いて来た」

本節では、位置前置詞（(12)の局所位置前置詞*nâa* ‘in front of’など）、経路前置詞（(12)の起点前置詞*càak* ‘from’など）、動詞（(12)の様態動詞*dəən* ‘walk’、直示動詞*maa* ‘come’など）に分けて記述する。

2.1. 位置前置詞（包括位置前置詞、局所位置前置詞）

ある物体や空間の位置を特定する前置詞を位置前置詞と呼ぶ。タイ語の位置前置詞は名詞の機能も持ち、正真正銘の前置詞ではない。移動表現では、

位置前置詞によって経路参照物 (起点, 通過点, 通過経路, 着点) の位置を特定することができる。

| | | | |
|--------------------------|-------------|-------------------|------------------|
| (13) <i>mêe</i> | <i>waaj</i> | <i>phâa</i> | <i>thâap</i> |
| mother | put | cloth | lie.flat.against |
| <u><i>dâan</i></u> | | <u><i>bon</i></u> | <i>tûu</i> |
| <u>on/to.the.side.of</u> | <u>on</u> | | cabinet |

「母は布を置き (布が) 棚の上の面をぴったり覆った」

位置前置詞はその意味と生起順によって包括位置前置詞と局所位置前置詞の 2 種類に大きく分類できる。(13)では, 移動物が到着した場所の特定の位置が包括位置前置詞 *dâan* ‘on/to the side of’ と局所位置前置詞 *bon* ‘on’ によって表されている。

包括位置前置詞は, 物体や空間を表す名詞句 (あるいは局所位置前置詞 + 名詞句) を後ろに伴い, その位置に対して, 点, 面, 領域, 方面といった図式的な特徴付けをする (*thîi* ‘at’, *thêw* ‘in the region of’, *rôop* ‘around’, *thûa* ‘all over’, *khâj* ‘on/to the side of’, *dâan* ‘on/to the side of’, *phaaj* ‘in the side of’, *bûaj* ‘in the direction of’, *thaj* ‘in the direction of’, *klaaj* ‘in the center of, in the middle of’, *rawàaj* ‘among’)

局所位置前置詞は, 物体や空間を表す名詞句を伴い, その物体や空間固有の形態 (上部, 下部, 前部, 後部, 中, 外など) や, 重力関係や地理的に固定された方向座標軸によって決まっている方向性 (上, 下, 川上, 川下, 北, 南など) や, ある視点から見た相対的な方向性 (右, 左) といった対立的空間概念の値を特定する (*bon* ‘on’, *lâaj* ‘under’, *nay* ‘in’, *nôok* ‘out’, *nâa* ‘in front of’, *lăj* ‘behind’⁵, *nûa* ‘above, north’, *tây* ‘below, south’, *khwâa* ‘right’, *sáay* ‘left’)

これら2種類の位置前置詞 (包括位置前置詞と局所位置前置詞) は, (12) のようにどちらか1種類だけが使われることもあれば, (13) のように2種類が

⁵ Prasithratsint (2010: 71) は, 前置詞 *thîi* ‘at’ と名詞の間に生起する *lăj* は本来の名詞 ‘back’ であるとする (e.g. *thîi lăj (khǎj) thoorathát* ‘at + back (+ of) + television-set : テレビの後ろに’)。 *lăj* と後続名詞の間に属格前置詞 *khǎj* ‘of’ が生起し得ることをその証拠として挙げている。

到着動詞 *khâw* ‘enter’ に続くときにも着点前置詞 (*khâw sùu* ‘move into’) として機能する (Takahashi 2006: 116–117) ((17), (18))。

- (15) *chán khìi càkkràyaan maa càak rooŋ rian*
 PRONOUN ride bicycle come from school
 「私は学校から自転車に乗って来た」

起点前置詞 *càak* ‘from’ は、場所を表す名詞句を後ろに伴い、その場所が移動の起点であることを明示する。経路2動詞か直示動詞の後ろに置かれる。着点前置詞句がある場合はその前に置かれる。(15)では起点前置詞 *càak* が直示動詞 *maa* ‘come’ の後ろに生起している。

- (16) *mǎa wīŋ nǐi pay taam thaaŋ*
 dog run flee go along path
 「犬は道に沿って走って逃げて行った」

通過経路前置詞 *taam* ‘along’ は、場所を表す名詞句を後ろに伴い、その場所が移動の通過経路であることを明示する。直示動詞の後ろに置かれる。着点前置詞句がある場合はその前に置かれる。(16)では通過経路前置詞 *taam* が直示動詞 *pay* ‘go’ の後ろに生起している。

- (17) *chán nâŋ rôt pay càak rooŋ rian*
 PRONOUN sit car go from school
thǔŋ *thīi bâan*
to at house

「私は学校から家のところまで車に乗って行った」⁷

着点前置詞 *yaŋ* ‘to’, *thǔŋ* ‘to’, *sùu* ‘to’, *kàp* ‘with’ は、場所を表す名詞句を後ろに伴い、その場所が移動の着点 (*yaŋ*, *thǔŋ*, *sùu*) あるいは移動物の接触点 (*kàp*) であることを明示する。本来は動詞である *thǔŋ* ‘arrive’, *sùu*

⁷ タサニー・メーターピスィット氏によると、(17)は「(歩いたり自転車に乗ったりしてではなく) 車に乗って行った」という意味が強く、単純に「私が何をしたか」ということを述べる表現としては(17')のほうが自然であるという (cf. 注 11)。

- (17') *chán nâŋ rôt càak rooŋ rian pay thǔŋ thīi*
 PRONOUN sit car leave school go arrive at
bâan
 house

「私は車に乗って学校を離れ (去って) 行って家のところに着いた」

‘arrive and stay’ が着点前置詞 *thǔŋ* ‘to’, *sùu* ‘to’ として機能するのは、(17)のように起点前置詞句の後ろに置かれたときである。到着動詞 *khâw* ‘enter’ の直後に置かれた *sùu* も着点前置詞として機能する。(18)はその例である。

- (18) *sěeŋ sathón klàp maa khâw sùu taa*
 light reflect return come enter to eye
 「光は反射して戻って来て目に入った」

起点前置詞，通過経路前置詞，着点前置詞と場所を表す名詞句の間に位置前置詞が生起することもある。(17)では着点前置詞 *thǔŋ* ‘to’ と到着場所を表す名詞句 *bâan* ‘house’ の間に包括位置前置詞 *thîi* ‘at’ が生起している。

2.3. 動詞（様態動詞，経路1動詞，経路2動詞，直示動詞，到着動詞）

移動の様態，移動の経路，移動の結果（到着）を表す動詞は，その意味と生起順によって次のように大きく5種類に分けられる。①様態動詞，②経路1動詞，③経路2動詞，④直示動詞，⑤到着動詞。(19)の *dəən* が様態動詞，*thǔy* が経路1動詞，*klàp* が経路2動詞，*pay* が直示動詞，*chon* が到着動詞である。

- (19) *dək dəən thǔy klàp pay*
 child walk (start.to)move.backward return go
chon kâw?îi
 bump chair

「子供は歩いて後退りして戻って行き椅子にぶつかった」

2.3.1. 様態動詞

様態動詞は，移動の様態（と移動物、付帯状況）という意味要素を包入した動詞である。様態動詞の典型的な語彙アスペクトは継続相である。経路参照物を表す名詞句を直接従えることができない。どの身体部位を使うのかがはっきりしており，我々人間にとって身近で，そのため具体的に想起することが容易な基本的身体活動を表す動詞が多い (Chuwicha 1993: 40)。移動の様態を特定する程度の違いによって，どの言語にも存在するであろう特定性の低い（いわゆる基本レベルの意味を表す）一般様態動詞と，特定性の高い特定様態動詞に分けることができる。タイ語の様態動詞の意味内容は極めて多

様である (Takahashi 1997)。特定様態動詞の数と種類が非常に豊富であることがタイ語様態動詞の特徴である。

- (20) *mæw* *kradòot* *khâam* *kamphæŋ*
 cat jump cross wall
 「猫は跳んで壁を越えた」

(20)は一般様態動詞 *kradòot* ‘jump’ を含む主体移動表現の例である。一般様態動詞は一般的な移動の様態を表す。移動物は何か、どのような特徴を持っているのかを特定する動詞が多い (e.g. *kradòot* ‘jump’, *klîŋ* ‘roll’, *kwèŋ* ‘swing’, *khlaan* ‘crawl’, *khûuup* ‘creep’, *dæŋ* ‘walk’, *bin* ‘fly’, *lɔɔy* ‘float’, *wîŋ* ‘run’, *lǎy* ‘flow’)

- (21) *chán* *thõom* *khâw* *pay* *hǎa*
 PRONOUN rush.upon enter go approach
khamooy
 thief

「私は前のめりに突進して行き泥棒に近付いた (=私は泥棒に跳びかかった)」

(21)は特定様態動詞 *thõom* ‘rush upon’ を含む主体移動表現の例である。特定様態動詞はより特定の移動の様態を表す。どの身体部位 (あるいはその他の移動の手段) をどのように使って移動するのか, 速度は速いか遅いか, 移動の方向は前か後ろか上か下か, 移動者はどのような様子か, 移動物は複数か, どのような空間を通るのか, 経路にはどのようなユニークな特徴があるかなど, 細かい弁別的意味素性を持つ (e.g. *kâaw* ‘step’, *kracoon* ‘leap’, *kraséŋ* ‘inch’, *khayəp* ‘budge’, *kraden* ‘hurtle’, *kràak* ‘rush up to’, *câm* ‘walk quickly’, *sæŋ* ‘outstrip’, *tày* ‘clamber’, *thõom* ‘rush upon’, *thayaan* ‘launch’, *thalák* ‘spurt out’, *sêek* ‘cut in’, *bìat* ‘press’, *phèn* ‘rush out of’, *phûŋ* ‘spout’, *luy* ‘wade’, *lây* ‘chase’, *traween* ‘wander’, *bùŋ* ‘speed’, *pràat* ‘dash’, *prìi* ‘dash’, *fâa* ‘break through’, *rîi* ‘rush directly to’, *hèe* ‘parade’, *dândôn* ‘trudge’, *lúay* ‘ramble’, *trèe* ‘stroll’, *yôŋ* ‘tiptoe’, *phlâŋ* ‘move away quickly’, *phlùp* ‘move back suddenly’, *wèek* ‘push one’s way through’)

これらの様態移動動詞以外にも、移動の様態を表すために使われる語がある。例えば、移動以外の活動を表す基本的身体活動動詞 (e.g. *yím* ‘smile’, *kaaŋ khěen* ‘spread one’s arms’, *thǔu* ‘bear, hold’, *rúm* ‘hold in one’s arm’⁸, *sǎaw tháaw* ‘draw one’s feet, quicken one’s pace’, *thót fii tháaw* ‘stretch one’s legs, slow one’s walk’), 心的態度を表す動詞 (e.g. *húut hát* ‘have a bad temper’), 経路の形を表す動詞⁹ (e.g. *troŋ* ‘be straight’, *khót* ‘be zigzag’), 特徴的な移動の様態を表す擬態語, 擬声語 (e.g. *púan pían* ‘wander around’, *krahùut krahòp* ‘pantingly’, *puŋ paŋ* ‘sound of a loud noise’) などが挙げられる。基本的身体活動動詞と心的態度動詞は様態動詞と同じ統語位置に生起する動詞だが、その他の語は副詞的に機能し、比較的自由に様々な統語位置に生起し得る。

2.3.2. 経路1動詞

経路1動詞は、移動の起点／終点に関係する方向性(と移動物, 付帯状況)という意味要素を包入した動詞である。経路1動詞の典型的な語彙アスペクトは起動相あるいは前終結相である。起点からの方向性 (e.g. 木から落ちる) は起動相 (inceptive ‘start to...’ (Bisang 2003: 48)) をなす。終点までの方向性 (e.g. 海底に沈む) は前終結相 (prestadial ‘the situation before the terminal boundary highlighted’ (Bisang 2003: 48)) をなす。このように起点／終点という特定の局面と関係しているところが、経路1動詞が持つ、経路2動詞と異なる意味特徴である。構成員の数はかなり限られ、閉じられた類である (e.g. *càak* ‘leave (from...)', *tòk* ‘fall off’, *thǔy* ‘(start to) move backward’, *yóŋn* ‘turn back’, *rúaŋ* ‘drop off’, *lòn* ‘drop (onto...)', *com* ‘sink (onto...)'。 *càak* ‘leave

⁸ 「抱える, 手に持つ, 肩に担ぐ」など, 身体部位を使って何かを保持するという基本的身体活動を表す動詞は, 随伴運搬型の使役動詞 (e.g. 運ぶ, 導く, 引きずる) に分類されることがあるが, 本稿では, それらの動詞を「笑う, 手を広げる, 足を速める」などと同様の移動の様態を表し得る非移動動詞 (移動以外の活動を表す基本的身体活動動詞) の1種とみなし, ここに挙げておく。それらの動詞が表す動作は, 移動の原因ではなく, むしろ広い意味での移動の様態であると解釈できる。

⁹ タイ語では, 活動や認識などの動的な事象を表す語と, 属性や形状などの静的な事象を表す語との間に, 決定的な形態論的, 統語論的差異が見られない。そのため, どちらの語も動詞に分類される。静的な事象を表す語は状態動詞と呼ばれ, 動詞の下位分類とされることが多い。

(from...)', *tòk* 'fall off' は起点を表す名詞句を従えることができる。なお, *càak* 'leave (from...)' は起点前置詞としての用法も持つ (2.2.節を参照)。

2.3.3. 経路2動詞

経路2動詞は、移動の通過点や通過経路に関係する方向性 (と付帯状況) という意味要素を包入した動詞である。経路2動詞の典型的な語彙アスペクトは達成相である。構成員の数はかなり限られ、閉じられた類である (e.g. *khâw* 'enter', *ɾòk* 'exit', *khûn* 'ascend', *loŋ* 'descend',¹⁰ *klàp* 'return', *khâam* 'cross', *taam* 'follow', *phàan* 'pass over', *phón* 'go through', *lát* 'cut across', *lɔ̃* 'go along', *líap* 'go along', *lám* 'go off a boundary', *læy* 'go beyond', *sǔan* 'pass each other')。通過経路を表す名詞句を従えることができる。*phón* 'go through', *læy* 'go beyond', *sǔan* 'pass each other' は通過点を表す名詞句を従えることができる。*klàp* 'return' は着点を表す名詞句を従えることができる。なお, *taam* 'follow' は通過経路前置詞としての用法も持つ (2.2.節を参照)。

2.3.4. 直示動詞

移動の直示性 (話者の視点を基準として、そこから離れるのかあるいは近づくのか) という意味要素を包入した動詞である。直示動詞には典型的な語彙アスペクトがない。構成員は2つの動詞 (*pay* 'go', *maa* 'come') だけで、完全に閉じられた類である。着点を表す名詞句を従えることができる。

2.3.5. 到着動詞

移動事象は移動が終結することによって完結する。目的地に到達したり、

¹⁰ *khâw* 'enter', *ɾòk* 'exit', *khûn* 'ascend', *loŋ* 'descend' という4つの経路2動詞はその他の経路2動詞に比べて生起頻度が高い。単一の移動事象を表す表現には通常これら4つの経路2動詞のどれか一つだけしか生起しないという選択制限がある。しかし、垂直方向の変化が激しい経路 (上ったり下ったり) の描写には *khûn* と *loŋ* が一緒に使われることがある (e.g. *khûn loŋ* 'ascend + descend', *khûn khûn loŋ loŋ* 'ascend + ascend + descend + descend', *khûn loŋ khûn loŋ* 'ascend + descend + ascend + descend')。同様に、閉じられた空間の境界を繰り返し通過すること (入ったり出たり) を描写するために、*khâw* と *ɾòk* が一緒に使われることもある (e.g. *khâw ɾòk* 'enter + exit', *khâw ɾòk khâw ɾòk* 'enter + exit + enter + exit')。

どこかで止まったり, 何かに当たったり, 移動の終結のあり方はさまざまだが, そうした移動事象の最終段階を移動の到着と総称する (Takahashi 2009b). 到着事象を表す動詞は, 移動の結果の出来事/付帯変化 (と移動物, 付帯状況) という意味要素を包入した動詞である。到着動詞には移動停止動詞 ((22) の *còt* ‘stop’ など) と状態変化動詞 ((23) の *tèek* ‘break’ など) が含まれる。移動停止動詞は移動動詞であるが, 状態変化動詞は移動動詞ではない。

(22) *rót lèn khâw maa còt nâa ráan*
car run enter come stop in.front.of shop

「車は走って入って来て店の前に止まった」

移動停止動詞は, 移動の結果, ある地点で止まることを表す。移動停止動詞の典型的な語彙アスペクトは瞬間相あるいは起動相である。到着場所の特徴, 到着したときに及ぼす影響の度合い, 到着後の様子などを特定するものが多い (e.g. *thǔŋ* ‘reach, arrive’, *khâw* ‘enter’, *sày* ‘put in’, *hǎa* ‘seek, approach’, *chon* ‘bump’, *tôŋ* ‘meet’, *thùuk* ‘touch, come into contact with’, *doon* ‘hit’, *patháa* ‘collide’, *krathóp* ‘strike against’, *yùt* ‘halt’, *còt* ‘stop’, *càp* ‘catch and hold’, *tít* ‘stick’, *thâap* ‘lay flat against’, *sùu* ‘get to and stay’)。 *yùt* ‘halt’, *còt* ‘stop’ を除いて, 着点を表す名詞句を従えることができる。なお, *thǔŋ* ‘arrive’, *sùu* ‘arrive and stay’ は着点前置詞としての用法も持つ (2.2.節を参照)。

(23) *cækan tòk tèek*
vase fall.off break

「花瓶は落ちて割れた」

状態変化動詞は, 状態が変化することを表す。状態変化動詞の典型的な語彙アスペクトは起動相である。到着動詞として使われる場合, 移動の最終段階で移動物の状態が変化することを表す (e.g. *tèek* ‘break’, *hàk* ‘bend’, *phaŋ* ‘fall to the ground’, *khàat* ‘be torn, be cut off’, *bùp* ‘be caved in, be damaged’)。

2.4. まとめ

すべての移動事象タイプ (主体移動, 客体移動, 抽象的放射) の表現に使われる移動の様態, 移動の経路, 移動の結果を表す形式を表1にまとめて示す。次節以降では, これらの形式がどのように組み合わさられてタイ語移動表

現の基本的な構文パターン（主要構成素の配列パターン）が形成されるのかを見ていく。

【表1 すべての移動事象タイプに使われる、移動の様態、経路、結果を表す表現（タイ語）】

| 意 味 \ 形 式 | 動 詞 | 動詞関連 要素 (副詞) | 名詞関連 要素 (前置詞) |
|------------------------|----------------|--------------------|---------------------|
| 様態 [継続相] | ✓ (2.3.1.節) | ✓ (2.3.1.節) | |
| 経路1 [起動相, 前終結相] | ✓ (2.3.2.節) | | |
| 経路2 [達成相] | ✓ (2.3.3.節) | | |
| 到着 [瞬間相, 起動相] | ✓ (2.3.5.節) | | |
| 経路局面 (起点, 通過経路, 着点) | | | ✓ (2.2.節) |
| 位置 (包括位置, 局所位置) | | | ✓ (2.1.節) |
| 直示的経路 | ✓ (2.3.4.節) | | |

3. 主体移動表現のパターン

タイ語の主体移動表現の具体例を以下に挙げる。

(24) *chán dǎən pay càak bān thǔŋ rooŋ rian*
 PRONOUN walk go from house to school
 「私は家から学校まで歩いて行った」¹¹

(24') *chán dǎən càak bān pay thǔŋ rooŋ rian*
 PRONOUN walk leave house go arrive school

¹¹ 経路1動詞 *càak* 'leave' は（経路2動詞・直示動詞が共起する場合）必ず経路2動詞・直示動詞の前に生起しなければならないが、(24)ではその定位置を外れて基本単位の外に生起し、起点を表す名詞句を伴って起点前置詞として機能している。到着動詞 *thǔŋ* も、基本単位の外に生起する起点前置詞句あるいは通過経路前置詞句に後続するときは後ろに着点を表す名詞句を必ず伴い、着点前置詞として機能する。このように(24)では *càak* は起点前置詞として、*thǔŋ* は着点前置詞として機能している。一方、(24')では、直示動詞 *pay* の前の *càak* は経路1動詞として機能し、直示動詞 *pay* の直後の *thǔŋ* は到着動詞として機能している。(24')のほうが無標で素直な表現であると判断するタイ語母語話者もいる。

「私は歩いて家を離れて (去って) 行って学校に着いた」

- (25) *dèk rǎn khlaan pǎw pĕe*
 baby crawl feebly

「赤ん坊はよたよた這った」

- (26) *nák rian thǔŋ rooŋ rian mûa takîi ní*
 student arrive school just.now

「生徒はつい先ほど学校に到着した」

- (27) *phĕe lǎylalǎŋ lǎy pratuu nám*
 raft drift go.beyond water.gate
khâw maa nay sà?
 enter come in pond

「筏は漂流して水門を通り過ぎて池の中に入って来た」

- (28) *lûuk bǎn tòk loŋ maa yùt thîi tór*
 ball fall.off descend come halt at desk

「ボールは落ちて下りて来て机のところで止まった」

タイ語の主体移動表現の構文パターンは、起点前置詞／通過経路前置詞を伴う(24)のようなパターンと、それを伴わない(24′)のようなパターンに分かれる((26)–(28)も後者に属する)。起点前置詞／通過経路前置詞を含むパターンと起点前置詞／通過経路前置詞を含まないパターンでは、起点／通過経路の表し方が異なる。前者では起点前置詞句／通過経路前置詞句 (e.g. (24)の *càak bâan* ‘from the house’) によって (より周辺的な事象参与者としての) 起点／通過経路が描写されるが、後者では経路1動詞句／経路2動詞句 (e.g. (24′)の *càak bâan* ‘leave the house’) によって (より中心的な事象参与者としての) 起点／通過経路が描写される。それぞれのパターンを表2と表3に示す。¹²

¹² 表 2–5 では、上段に副事象の種類別 (使役事象, 移動事象, 到着事象) が斜体で示され、中段にそれら副事象を表す語の品詞別 (動詞, 前置詞) が示され、下段に動詞と前置詞の種類別が示されている。動詞の種類名の下に小さく記載されているのは、それらの動詞に続き得る名詞句が表す経路参照物の種類である。

【表 2 起点前置詞／通過経路前置詞を伴う主体移動表現のパターン】

| 副事象 | 移動 | | | | | | |
|------------|----|-----------|----------------------------|----------|-----|----------|----|
| 品詞 | 動詞 | | | | 前置詞 | | |
| 下位類 参照物 | 様態 | 経路1 起点 | 経路2 通過点, 通過経路, 着点 | 直示 着点 | 起点 | 通過 経路 | 着点 |

【表 3 起点前置詞／通過経路前置詞を伴わない主体移動表現のパターン】

| 副事象 | 移動 | | | | 到着 | |
|------------|----|-----------|----------------------------|----------|----------|----|
| 品詞 | 動詞 | | | | 前置詞 | |
| 下位類 参照物 | 様態 | 経路1 起点 | 経路2 通過点, 通過経路, 着点 | 直示 着点 | 到着 着点 | 着点 |

起点前置詞／通過経路前置詞を含む構文パターン（表2）は移動事象だけで成り立ち、到着事象を含まない（(24)）。到着動詞用法を持つ *thǔŋ* と *sùu* が使われる際も、必ず着点名詞句を伴って着点前置詞として機能し、起点前置詞句、通過経路前置詞句の後ろに生起する。

一方、起点前置詞／通過経路前置詞を含まない構文パターン（表3）は、移動事象と到着事象という二つの副事象から成り立つ場合（(24'), (28)）があるほか、移動事象あるいは到着事象という一つの副事象だけで成り立つ場合（(25), (27)は移動事象のみ、(26)は到着事象のみ）もある。このパターンでは到着動詞が本来の移動動詞として機能し到着事象を表す。

表2と表3に挙げられているのは主体移動表現の主要構成素である動詞と経路前置詞句のみである（位置前置詞句、名詞句、副詞句、文法標識¹³などの生起スロットは省略されている）。いずれの構成素も必須構成素ではなく、生起することが可能な構成素である。ただし、少なくとも一つの移動動詞が生起しなければ、主体移動事象を表すことはできない。

移動事象を表すのに使われる4種類の移動動詞の連なり「様態動詞、経路1動詞、経路2動詞、直示動詞」がタイ語移動表現の基本単位であり、必ずこ

¹³ 経路2動詞 *khâw* 'enter', *ɔ̀ɔ̀k* 'exit', *khûn* 'ascend', *loj* 'descend' と直示動詞 *pay* 'go', *maa* 'come' はアスペクト標識の機能も持ち、アスペクト標識としての生起頻度も非常に高い。本稿では紙幅の関係でアスペクト標識についての分析は割愛する。

の順番で生起する。主体移動表現では、(29)のように、この基本単位が複数連なって生起することが珍しくない。¹⁴

- (29) *lúk* *khûm* *dəənthaaŋ* *tò*
 [get.up ascend] [travel continue]
lát lɔʔ *pay* *taam* *sâak raakhaan*
 [take.a.short.cut.along.the.side go] along the.ruin.of.building
phàan *thanǝn* (...省略)
 [pass.over road (...省略)]
 「起き上がって、旅をし続け、ビルの廃墟に沿って近道をして行って、(...) 道路を通った」 (Kessakul 2005: 36-37)¹⁵

4. 客体移動表現

客体移動表現には、2節で挙げた移動の様態を表す形式(様態動詞)、移動の経路を表す形式(経路1動詞、経路2動詞、直示動詞、起点前置詞、通過経路前置詞、着点前置詞)、移動の結果を表す形式(到着動詞、着点前置詞)の他、移動の原因を表す形式(使役動詞)が含まれる。(30)では使役動詞 *waan* ‘place’ と経路2動詞 *loŋ* ‘descend’ が共起し、(31)では使役動詞 *lâak* ‘drag’ と直示動詞 *pay* ‘go’ が共起している。

- (30) *khruu* *waan* *nâŋsǔu* *loŋ* *bon* *tóʔ*
 teacher place book descend on desk

「先生は本を持って下ろし(本が)机の上に下りた(=先生は本を机の上に置いた)」

¹⁴ Kessakul (2005: 141, 155-156) は、移動の経路が複雑な主体移動事象(複数の中継点や経路参照点を含み、それらの点をつなぎ合わせることによって経路が拡大化した主体移動事象)を Slobin (1996: 202) に倣って旅程(journey)と呼び、タイ語でそうした旅程事象を表現することが可能であるのは、次のような基本単位の反復スキーマに沿って経路の表現を拡大させていくことが許されているからだと説明する。「[(様態)+(経路1)+(経路2)+(直示)]+[(様態)+(経路1)+(経路2)+(直示)]+...∞」。丸括弧はその意味要素が非必須であることを意味する。

¹⁵ 移動事象を表す基本単位内の経路2動詞 *taam* ‘follow’ の定位置は(直示動詞と共起するときは)必ず直示動詞の前であるが、(29)ではその定位置を外れて基本単位の外に生起し、経路を表す名詞句を伴って通過経路前置詞 *taam* ‘along’ として機能している。

- (31) *cháan* *lâak* *sun* *pay*
elephant drag log go

「象は丸太を引きずって行った」

タイ語には、移動の経路という意味要素を包入する使役動詞 (bringなどの使役的直示動詞や「落とす」などの使役的経路動詞) はなく、使役の手段 (と付帯状況) という意味要素を包入する使役動詞しかない。直示性が特定された使役移動を表すには、*ɹaw* (～) *maa* ‘take (～) come’ ‹(～を)持って来る› や *nam* (～) *maa* ‘lead (～) come’ ‹(～を)導いて来る› のように、使役動詞と直示動詞を組み合わせる。経路が特定された使役移動を表すには、*tèɹ* (～) *tòk* ‘kick (～) fall off’ ‹(～を)蹴って(～が)落ちる› や *yók* (～) *khûn* ‘lift (～) ascend’ ‹(～を)持ち上げて(～が)上がる› のように、使役動詞と経路2動詞を組み合わせる。

4.1. 移動の原因 (使役の手段) を表す動詞

タイ語の使役動詞は、様態動詞と同様、どの身体部位を使うのかがはっきりしている基本的身体活動を表す動詞が多い。ここでは、典型的な語彙アスペクトの違いによって、継続相を持つ随伴運搬型の使役動詞、達成相を持つ継続操作型の使役動詞、起動相を持つ開始時起動型の使役動詞の3種類に分ける。

随伴運搬型の使役動詞は、初めから終わりまで力を加え続けなければならない移動事象を表す動詞である。どの身体部位をどのように使うのか、どのように力を加え続けるか、何を運ぶのかなど、細かい弁別的意味素性を持つものが多い (e.g. *khǒn* ‘transport’, *cuuŋ muu* ‘lead someone by hand’, *nam* ‘lead’, *phaa* ‘guide someone’, *lâak* ‘drag’)

継続操作型の使役動詞は、使役者が (手を動かすなどして) ものを継続的に操作しながらそのものの位置を変化させる事象を表す動詞である。操作の力加減や移動の方向性を特定するものが多い (e.g. *yók* ‘lift’, *yìp* ‘pick’, *waan* ‘put, place’, *ɹaw* ‘take’, *sày* ‘put in’, *dan* ‘push’, *duuŋ* ‘pull’, *chùt* ‘pull’, *krachâak* ‘jerk’)

開始時起動型の使役動詞は、一度だけ力を加えて後は惰性に任せる移動事

象を表す動詞である。随伴運搬型の使役動詞と同様、どの身体部位をどのように使うのか、どのように力を及ぼすのか、何を動かすのかなど、細かい弁別的意味素性を持つものが多い (e.g. *dìit* ‘flick’, *tèʔ* ‘kick’, *dòʔ* ‘toss, bounce’, *phlâk* ‘push’, *lûan* ‘slide’, *yoon* ‘throw’, *khwâaŋ* ‘throw’, *paa* ‘throw’)

4.2. 客体移動表現のパタン

タイ語の客体移動表現の具体例を以下に挙げる。

- (32) *phôʔ khǒn khǒŋ dǎən troŋ ʔòk*
 father transport thing walk be.straight exit
pay
 go

「父は物を運び真っ直ぐ歩いて出て行った」

- (33) *mǎʔ ɾaw phâa chét nâa ʔòk càak krapǎw*
 doctor take handkerchief exit from pocket

「医者ハンカチを取って (ハンカチが) ポケットから出た (= ポケットからハンカチを取り出した)」¹⁶

- (34) *lûuk chaay yoon khayàʔ càak chán bon loŋ*
 son throw trash leave upper.floor descend
pay kɔŋ pen phuu khǎw
 go pile.in.heaps

「息子はゴミを投げ (ゴミが) 上階を離れて下りて行って山のよ
うに積み上がった」

タイ語の客体移動表現は、使役動詞の種類 (随伴運搬型、継続操作型、開始時起動型¹⁷) によって構文パタンの制約が異なる。継続操作型以外の使役

¹⁶ 日本語ではポケットからハンカチを取り出す動作 (継続操作) を表す表現に直示動詞を使うことができない (「ポケットからハンカチを取り出して来る」とは言えない) が、タイ語では直示動詞を使えないことはない (「*ɾaw phâa chét nâa ʔòk maa càak krapǎw* (take + handkerchief + exit + come + from + pocket)」と言えないことはない)。

¹⁷ 開始時起動型の客体移動表現には誘発動詞 (非現実事態補文標識) *hây* が挿入されることがある。*hây* が挿入される箇所は使役動詞の後ろ (e.g. *tèʔ hây man sǎn klâp* ‘kick + INDUCE + it + pass each other + return’) か、移動物を表す名詞句の後ろ (e.g. *tèʔ man hây sǎn klâp* ‘kick

動詞では、(移動の時間幅を含意する達成相の) 経路2動詞あるいは(達成相の読みが可能な) 直示動詞との共起が必須である。そうでなければ、使役者によって動かされた移動物の移動を表現することはできない。一方、(それ自身が移動の時間幅を含意する達成相の) 継続操作型の使役動詞は、経路2動詞や直示動詞を伴わずとも客体移動を表現できる。移動の最終局面(結果の出来事/付帯変化)を表す到着動詞を直接後続させることもできる((13), (14))。

客体移動表現の構文パターンは、主体移動表現の構文パターンと同様、起点前置詞/通過経路前置詞を伴うか否かによって二つのパターン(表4と表5)に分かれる。

【表4 起点前置詞/通過経路前置詞を伴う客体移動表現のパターン】

| 副事象 | 使役 | 移動 | | | | | | |
|------------|----|----|-----------|----------------------------|----------|-----|----------|----|
| 品詞 | 動詞 | | | | | 前置詞 | | |
| 下位類 参照物 | 使役 | 様態 | 経路1 起点 | 経路2 通過点, 通過経路, 着点 | 直示 着点 | 起点 | 通過 経路 | 着点 |

【表5 起点前置詞/通過経路前置詞を伴わない客体移動表現のパターン】

| 副事象 | 使役 | 移動 | | | | 到着 | |
|------------|----|----|-----------|----------------------------|----------|----------|-----|
| 品詞 | 動詞 | | | | | | 前置詞 |
| 下位類 参照物 | 使役 | 様態 | 経路1 起点 | 経路2 通過点, 通過経路, 着点 | 直示 着点 | 到着 着点 | 着点 |

両構文パターンに挙げられている主要構成素の中で、必ず客体移動表現に生起しなければならないのは使役動詞だけであり、その他はすべて非必須の構成素である。起点前置詞/通過経路前置詞を含む構文パターン(表4)は使役

+ it + INDUCE + pass each other + return’)である。hâyを使うと、使役者の目的意識が強調され(e.g. 折り返し戻るように蹴った)、本来的な客体移動表現(使役事象+移動事象)から逸脱することになる。使役者の行動(使役事象)に焦点が当てられ、移動物の移動(移動事象)はその行動の目的事象(非現実事象)として従属的に表現されるからである。言い換えれば、使役事象が中核事象となって前景化され、移動事象は従属事象となって補文化され背景化される。

事象と移動事象から成り立ち、到着事象を含まない ((33))。一方、起点前置詞／通過経路前置詞を含まない構文パターン (表5) は使役事象と移動事象から成り立つ場合 ((30), (31), (32)) もあれば、使役事象, 移動事象, 到着事象から成り立つ場合 ((34)) もある。

5. 抽象的放射の表現

タイ語では、虚構の空間移動の表現パターンと実際の空間移動の表現パターンには大きな違いが見られない (Takahashi 2001)。抽象的放射であっても、その放射が主体移動であれば (放射物を主語とする移動として捉えれば) 主体移動表現の構文パターン (上記の表2, 表3) をとり、その放射が客体移動であれば (放射を生じさせる使役者を主語とする使役移動として捉えれば) 客体移動表現の構文パターン (上記の表4, 表5) をとる。しかし抽象的放射の表現パターンに特有の特徴として以下の2点が挙げられる。1点目は、発声動詞 (e.g. *ร้อง* ‘cry’), 視覚動詞 (e.g. *มอง* ‘look’), 音響動詞 (e.g. *ดัง* ‘loud, resound’) が、使役動詞や様態動詞に代わって抽象的放射の原因や様態を表すことができることである。2点目は、起点前置詞と着点前置詞が共起しないということである。抽象的放射の起点が起点前置詞句によって表されるとき、その抽象的放射の着点は着点前置詞句ではなく到着動詞句によって表される。起点と着点の両方が前置詞句で表されると、経路全体が非時間的に描写される。つまり、「起点を去る, 着点に至る」といった動詞句を使った動的描写とは対照的に、「起点から着点まで」といった (時間経過を含まない) 静的描写となる。抽象的放射表現では、起点, 着点のどちらか一つを非時間的, 静的に描写することは許されるが、経路全体を非時間的, 静的に描写することは許されない。

5.1. 視覚的放射の表現

視覚的放射の表現では視線の動きがあたかも見えるように表現され、視覚者と視覚者の視界にあるものの相対的な位置関係が視線の虚構移動によって具象化される。視覚的放射の移動物は視線である。自らの目から視線を伸ばす視覚者が、その視線の移動を終始操る使役者である。視線の動きを止める

こともできる。視線の先端が、視界にあるもの¹⁸を参照点として、前後（伸び縮み）上下左右自在に動く。視線の動きは主体移動（(35), (36)）あるいは客体移動（(37)-(39)）として表現される。タイ語では、視線を引き抜く、視線を差し入れる、視線を切り込むなどと表現できることから、視線は真っ直ぐな固体の線として捉えられていることがわかる。視線の移動の着点（視覚者が見ている場所）のイメージは、点、面、何かの側、内空間、外空間、周囲、辺り一帯、ある方向の空間などである。視線が点や面に到着すると捉えられるということは、視線のイメージの実質性が高く、視線の移動のイメージも具体的であることを意味する（Takahashi 2002）。

タイ語の視覚的放射を表す表現の具体例を以下に挙げる。タイ語では、抽象的放射（視線の伸び縮み）と視焦点の移動（伸ばされた視線の先端部分の位置—視焦点が合っているところ—の変化）を切り離して別々の移動現象として表現するわけではない。そこで本稿では、便宜的に、視覚的放射という用語を、視線の全体的な動き（抽象的放射と視焦点の移動が一体化された動き）を意味する用語として使うことにする。つまり、松本（本巻第1章）でいう視覚的放射と視覚的放射方向移動を区別しない。

- (35) *săay taa mɔɔŋ pay taam mɛ̃e nám*
line.of.vision look go along river
「視線は川に沿って見て（伸びて）行った」

- (36) *săay taa thɔt pay sù thɔŋ fáa*
line.of.vision stretch go arrive.and.stay sky
「視線は伸びて行って空に到着しそこに止まった」

¹⁸ 視界にあるものは注視しているもの（視線の移動の着点）に限らない。例えば「視線が窓を通り抜けて外に伸びる」の「窓」や「視線が川を越えて対岸へ伸びる、視線が川に沿って下流へ伸びる」の「川」のように、視界の中にあって視線の移動の参照点として言及され得るものは様々な形で存在する。

- (37) *yaay* *thôot* *săay taa* *mɔɔŋ* *ɾəək*
 grandmother stretch line.of.vision look exit
pay *càak* *hôn*
 go from room

「祖母は視線を伸ばして見て（視線が伸びて）部屋から出て行った」

- (38) *luŋ* *kwàat* *săay taa* *ɾəək* *pay* *khân nòk*
 uncle sweep line.of.vision exit go outside

「伯父は視線を掃くように移動させ（視線が）外に出て行った（＝伯父は視線をゆっくり動かし外を見た）」

- (39) *chán* *mɔɔŋ* *taam* *khûn* *pay*
 PRONOUN look follow ascend go

「私は見て（視線を送り）（視線が何かに）従って上がって行った」

(35), (37)では視覚動詞 *mɔɔŋ* ‘look’ が様態動詞として機能している。しかし視線を表す名詞句が使われれば, (36), (38)で示したように、視覚動詞は必ずしも生起する必要はない。また, (39)の視覚動詞 *mɔɔŋ* ‘look’ は使役動詞として機能している。使役動詞として機能する視覚動詞は様態動詞とは共起しない。

5.2. 音声的放射の表現

音声的放射の表現では音の動きがあたかも見えるように表現され、音放出者と聴覚者あるいはその他のものとの相対的な位置関係が音の虚構移動によって具象化される。音声的放射の移動物は音である。意図的にであれ非意図的にであれ音を発生させる人やもの（音放出者）が音を周囲に送り出す使役者である。視覚的放射の使役者である視覚者（継続操作型の使役者）と異なり、音声的放射の使役者である音放出者（開始時起動型の使役者）は音をある方向に向けて放つことはできるが、放った後は音の移動を制御することができない。音は一方向に移動したり、あらゆる方向に拡散したり、何か当たって跳ね返ったり、元の位置に戻ってきたりする。こぼれ落ちたり、抜け

出たりもできる。ただし前にしか進まず、後退することはできない。ある地点に止まることもできず、常に動いている。音は一種の流動体として捉えられているようである。タイ語ではさらに、音が追いかける、音がすれ違うなどと表現でき、音は多少力強さを持っていると考えられている。音の動きは主体移動 ((40), (41)) あるいは客体移動 ((42), (43)) として表現される。聴覚者は音の移動の着点であったり、通過点であったりする。音の移動の着点のイメージは、誰か、誰かの耳、何かの側、内空間、外空間、辺り一帯、ある方向の空間などである。視線と異なり、音は (人や人の耳を除き) 特定の点や面に到着すると捉えられることはない。視線のイメージより音のイメージのほうが実質性が低く、そのため音の移動のイメージは視線の移動のイメージよりは具体性に欠けるということである (Takahashi 2002)。より具体的にイメージされる視線にはそれ自体の長さ (視覚者と視覚者が見ているものとの間の距離) が考えられるが、より抽象的にイメージされる音には空間的な長さはなく、その代わり時間的な長さが考えられる。

タイ語の音声的放射の表現の具体例を以下に挙げる。

(40) *sǎŋ takoon ɾòɔk maa càak hòŋ nám*
shout exit come from bathroom
「叫び声は浴室から出て来た」

(41) *sǎŋ daŋ maa krathóp hǔu*
sound resound come hit ear
「音は大きく響いて (漂って) 来て耳に衝突した」

(42) *pâa rɔ́ŋ dàa loŋ maa*
aunt cry condemn descend come
càak khâŋ bon
from upper.side
「伯母は上から叫んで責め (声を送り出し) (声が) 下りて来た」

(43) *phûan sòŋ sǎŋ ɾòɔk maa*
friend send sound exit come
「友人は声を送って (声が) 出て来た」

(41)の音響動詞 *daŋ* ‘resound’ は様態動詞として機能し, (42)の発声動詞 *rɔ́ɔŋ* ‘cry’, *dàa* ‘condemn’ は使役動詞として機能している。音を表す名詞句があれば, 音響動詞, 発声動詞は必ずしも必要ないが, 音を表す名詞句がなければ, それらの動詞が必要となる。先に「単一の移動事象を表す移動表現の中に使役動詞は通常一つしか生起しない」と述べたが (1.2.節), 発声動詞を使役動詞として含む場合は(42)のように複数の発声動詞が共起することがある。

6. 移動事象タイプ別の経路概念表現のまとめ

タイ語の移動表現では表6に示すように経路概念が表現される。

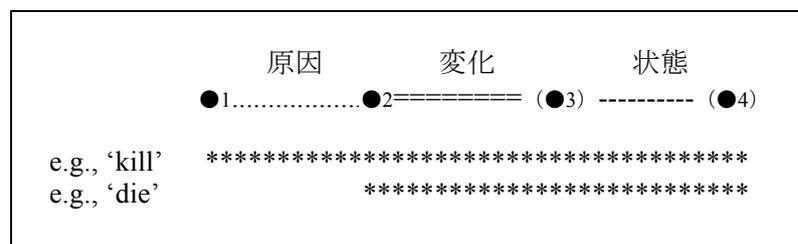
【表 6 移動事象タイプ別の経路概念表現位置 (タイ語)】

| 表現パターン 事象のタイプ | | 動詞句及び前置詞句の連鎖 |
|------------------|------------|---|
| 具体的 移動 | 主体移動 | [<small>移動事象</small> 様態 V+経路 1 V+経路 2 V+直示 V] + [<small>到着事象</small> 到着 V] (+諸 PP) |
| | 客体 移動 | 随伴 運搬型 |
| | | 継続 操作型 |
| | 開始時 起動型 | [<small>使役事象</small> 使役 V] + 上記の連鎖 |
| 抽象的 放射 | 主体移動的 | [<small>移動事象</small> 様態 (視覚・音響) V+経路 1 V+経路 2 V+直示 V] + [<small>到着事象</small> 到着 V] (+諸 PP) |
| | 客体移動的 | [<small>使役事象</small> 使役 (視覚・発声) V] + 上記の連鎖 |

移動事象の種類にかかわらず, 経路関連の動詞が複数共起するときは「経路1動詞, 経路2動詞, 直示動詞, 到着動詞」の語順となり, 経路関連の前置詞が複数共起するときは「起点前置詞, 通過経路前置詞, 着点前置詞」の語順となる。しかしどれも必須構成素ではないため, 様々な生起パターンがあり得る。

7. タイ語移動表現の複合性 (非統合性)

タイ語移動表現の複合性は、事象構造の因果連鎖の観点から捉えられる。図1は、Croft (1990, 1998) が提示した事象構造の因果連鎖 (事象の力学的構造¹⁹) モデルである。Croft (1998: 47) によると、この事象構造は動詞が表す事象概念の理想認知モデルであり、いかなる言語のいかなる動詞についてもこのモデルを使ってその動詞が表す因果連鎖の形 (事象参加者の数と種類および事象枠の幅) を説明できるという。²⁰



【図1 動詞が表す事象の理想認知モデル (事象構造) (Croft 1998)】

下の図2は、タイ語移動表現に含まれる各種類の動詞が表す因果連鎖の形を図式的に表したものである。タイ語移動表現によって表される複合的な移動事象の意味を分析的かつ的確に表示するため、Croft (1998) が提示したモデル (図1) をより精密にした (Takahashi 2009b)。第1に、定義が曖昧な〈変化〉という語彙アスペクト概念を継続相に相当する〈過程〉 (e.g. 転がる) と瞬間相に相当する〈変化〉 (e.g. 至る) に分割した。第2に、〈原因〉は使役事象、〈過程〉は移動事象、〈変化 (+状態)〉は到着事象と具体的に言い換えた。第3に、使役者、移動物、経路参照物 (起点, 通過点, 通過経路, 着点) とい

¹⁹ 言語と認知の力学 (force dynamics) 理論については Talmy (1976, 1988, 2000a) を参照されたい。

²⁰ 英語の語を例にとれば、以下のとおりである。使役動詞 kill が表す事象は二つの事象参加者—使役者 (他者に変化を及ぼすもの) (●1) と被使役者 (変化を被るもの) (●2, 3, 4) —が関与し、原因, 変化, 状態という三つの副事象すべてを焦点化する。起動動詞 die が表す事象は一つの事象参加者—独立者 (自ら変化を経るもの) (●2, 3, 4) —が関与し、変化, 状態という二つの副事象を焦点化する。

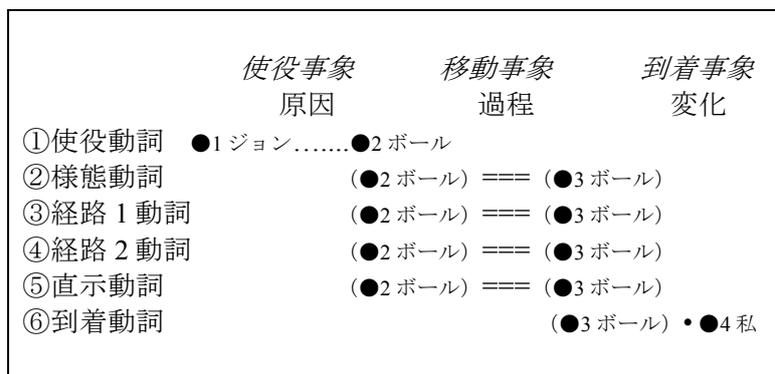
った事象参加者は、いずれも名詞句によって明示されない場合があるので、すべて括弧に入れて表示した。²¹



【図2 タイ語移動表現の因果連鎖モデル】

例として、客体移動表現(6)の事象構造を図3に示す(以下の事象構造を示す図では、簡略化のため前置詞句の表示を省略する)。因果連鎖上、全部あるいは一部重なり合った事象枠を持つ複数の副事象が合わさり、重複的あるいは連結的にまとまりを持った一つの事象構造を形作っていることがわかる。

(6) ジョンはボールを①蹴り(ボールが)②転がって③折り返し④入って⑤来て私の前で⑥止まった。



【図3 客体移動表現の事象構造の例】

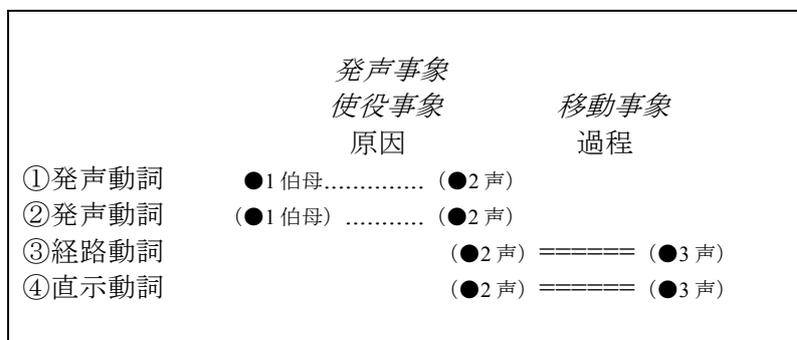
①使役動詞(蹴る)は原因(使役事象)を表し、②様態動詞(転がる)、③経路1動詞(折り返す)、④経路2動詞(入る)、⑤直示動詞(来る)は共に過程(移動事象)を表し、⑥到着動詞(止まる)は変化(到着事象)を表し

²¹ さらに、過程の終わりの位置に関与する事象参加者(●3)、変化の終わりの位置に関与する事象参加者(●4)、状態の終わりの位置に関与する事象参加者(●5)は、移動物と経路参照物のどちらでもあり得るので、その表示を可能にした。名詞句が生起しない(新たな事象参加者が表現されない)場合はすでに関与している移動物の関与が続き、名詞句が生起する(新たな事象参加者が表現される)場合は経路参照物が新たに関与することになる。

ている。②～⑥の動詞が表す移動事象および到着事象の参与者である移動物（ボール）が括弧の中に入っているが、それは、①の動詞が表す使役事象の参与者である移動物（ボール）が②～⑥の動詞が表す移動事象と到着事象にも引き続き関与していることを意味している（注21）。すなわち、使役事象に関与している（明示的な）ボールと移動事象および到着事象に関与している（非明示的な）ボールは同一のボールである。

抽象的放射表現の事象構造も図2のモデルを使って表すことができる。音声的客体放射表現(42)の事象構造を図4に示す。

(42) 伯母は上から①叫んで②責め（声を送り出し）（声が）③下りて④来た。



【図4 音声的客体放射表現の事象構造の例】

図4では、発声事象（意味を伝えるために声を発すること）と使役事象（音を発生させある方向に送り出すこと）が重なっている。注目すべきは、①～④の動詞が表す発声事象、使役事象、移動事象のすべてに関与している移動物（声）がいずれも括弧の中に入っていることである。音声的客体放射表現(42)には移動物（声）を表す名詞句は使われていないが、移動物（声）は非明示的なものとしてすべての副事象に関わっている。

このように、単一の事象構造を形成するのに動詞をいくつ使ってもよいことが、動詞（句）連続言語であるタイ語の最大の特徴である。タイ語話者は動詞（句）連続体を使ってさまざまな事象を非常に柔軟な形で言語化する。移動表現について言えば、使役事象、移動事象、到着事象という三つの副事象を別々の動詞を使って分析的に表現することが可能であり、移動事象は複数の動詞で多面的に描写することも可能である。（抽象的放射表現では使役事

象も複数の動詞で描写され得る。) また、事象参与者 (使役者, 移動物, 経路参照物) を名詞句によって必ず明示的に表現しなくてはならないわけではない。

8. おわりに

本稿ではタイ語移動表現の様々な特徴を述べてきた。その目立った特徴を以下に要約する。第1に、タイ語の移動事象表現を構成する語彙には比較的是っきりした役割分担が見られ、直示動詞を除き、意味的な多様性に富む。第2に、タイ語の移動事象表現は非常に融通のきく (伸縮自在な) 統語構造を持つ。一つの節の中で異種あるいは同種の複数の動詞が、前述のように意味的あるいは統語的な制約はあるものの、比較的自由に共存できるため (動詞間の競合が少ないため)、単一の移動事象を多次的 (重複的/連結的) に表現することが難なくできる。第3に、タイ語では因果連鎖 (事象の理想認知モデル) のどの部分に焦点を当てて移動事象を表現してもよい。ただし複数の副事象を焦点化する場合は、それらが隣り合っていることが条件である。タイ語話者はその時々場面や文脈に適した事象参与者の数と種類、事象枠の幅、各副事象の描写詳細度を選んで移動事象を表現する。